

令和六年度 山口県立大学 国際文化学部 文化創造学科 学校推薦型選抜（県内高校枠）
「小論文」 問題用紙

問 次の文章を読み、その要旨を示したうえで、地域で芸術活動を行うことの意義について、具体例を挙げて、あなたの考えを八〇〇字以内で述べなさい。

「地域」と「クリエイティビティ」が出会うとき、どのような作用が起こり、どのような可能性や問題点が浮かび上がっているのだろうか。

ここでは「クリエイティビティ」を「アート」や「芸術表現（活動）」と考え、兵庫県豊岡市が運営する舞台芸術のためのアーティスト・イン・レジデンス（注1）施設である城崎国際アートセンター（K I A C）が2014年に開館して以降、周囲で起こった出会いや変化の事例を紹介しつつ、その中で見えてくるものについて考えてみたい。

（中略）

2015年に実施したコミュニティダンス（地域の人が出演するダンス）の企画をきっかけに、プロジェクト終了後の2016年、参加していたダンスファシリテーターの女性が中心となってダンスのワークショップを定期的に開催するようになった。2018年には主催団体を一般社団法人化して、誰もが気軽にダンスができる環境を作ることを目的に、毎月3日間のオープンクラス（注2）をK I A Cで開催している。アーティストが創作を行う施設であるため、地域の方々にとっては訪れる機会が限られていたアートセンターが、今ではオープンクラスの開催期間中は子どもから大人まで市内外から多くの参加者で賑わうようになっていく。

また、K I A Cの影響で舞台芸術やアートが日常的に身近な存在となったことで、温泉街の旅館の若旦那たちがアートに地域活性化の手段としての可能性を感じ、2017年には東京から演劇カンパニーを自ら招聘（しょうへい）してアートプロジェクトを開催したことがあった。旅館の若旦那と城崎温泉でのインターンシップ（注3）に参加する都市部の学生たちが運営の中心となって実施したこのイベントは、アートの専門家ではない人たちがアートマネジメントの手法を活用して、旅館の閑散期の観光客誘致と地域の活性化促進のために自発的に実施された。

このふたつの事例はアートセンター自身の活動を契機として、その周囲の人たちが中心となって実施されたという点で、クリエイティビティが地域に波及している例として挙げることができる。

滞在アーティストの中には、時にアートセンターから飛び出し、その土地の歴史や文化をリサーチしたり、参加型のワークショップなどを行い、そこから得たさまざまなインスピレーションをもとに作品を創作する人もいる。

地域に古くから伝わる伝統芸能や民俗芸能をリサーチして作品の題材とする人、特定のコミュニティに関わりながら観客参加型の作品を創作する人、リサーチの対象や目的、手法は多岐にわたる。アーティストが独自の視点で地域を観察し、各々の方法論を用いて作品として提示することによって、そこに住む人々が日常生活の中では見逃してしまいがちな地域の価値や魅力を再考することにつながることもある。

しかし見方を変えると、このようにコミュニティや地域の文化的資源を題材にして作品を創作することは、アーティストが表現者という特権的な立場を通して地域のリソースを搾取することや、地域がその魅力発信のためにアートを利用することにつながってしまう可能性をはらむ点を指摘しておきたい。リサーチ対象との関係の築き方やテーマの扱い方について、アーティストと運営者、地域の人々という三者間のコミュニケーションや意識のすり合わせが重要となる。

演劇やダンス、美術や音楽といった既存の芸術表現の分野を超えて、それらの領域を横断するような表現を提示する作家、暴力や死、性や差別といった、日常生活においてはタブー視されがちなテーマを扱う作家、家父長制や資本主義といった現代の社会を構成するシステムや制度に対して、それとは異なる価値観や社会のあり方を提示するような作品を創作する作家が滞在することもある。

都市部と比べると、保守的な考え方も根強く存在する地方のまちにおいては特に、このようなアーティストの作品は、観客である私たちの常識や価値観を強く揺さぶり、時には嫌悪感すら抱かせることも起こり得る。しかしその様な作用には、普段私たちが「あたりまえ」としている価値観を問い直し、社会の制度や常識についてあらためて考えるきっかけとなる可能性がある。

これらはほんの一例だが、「地域」と「アート」が出会うことによって、直接的・間接的にポジティブとネガティブ両方の要素を含むさまざまな相互的な作用が起こっている。「地域」として「アート」が、どんな時でも地域活性化の役に立つというわけではない。時には摩擦や軋轢あつれきを生むような、取り扱いに技術や経験が必要とし、神経を使うものでもある。しかしだからこそ、そのような毒にも薬にもなる劇薬のようなアートは私たちが生きる社会にとって、小さくても無視できない声となり影響をあたえることがある。

社会や地域とまったく関わりを持たずに創作を行うアーティストや芸術表現は存在しない。アーティストも私たちと同様、社会に生きる一人の人間であり、多かれ少なかれその表現は彼ら／彼女らの生きる社会に影響を受け、それを映し出す鏡として機能する。そんなアーティストの生み出す作品と向き合うことによって、鑑賞者である私たち自身も何らかの影響を受けることになる。そのような小さな積み重ねのずつと先に、人々の集合体である社会や地域が変わっていく可能性があるように思う。

（出典 吉田雄一郎「地域」と「アート」——相互作用のその先に」野田邦弘・小泉元宏・竹内潔・家中茂編著『アートがひらく地域のこれから——クリエイティブティを生かす社会へ——』ミネルヴァ書房、二〇二〇年、一一三―一一四頁による。以上の文章に記述の形式について最小限の手を加えた。）

（注1） 国内外のアーティストが、一定期間滞在して、創作活動を行う機会を提供する事業。

（注2） 経験や年齢などを問わず、誰でも参加できるクラス。

（注3） 学生が、一定期間、企業等で就業体験をすること。

令和6年度 国際文化学部 文化創造学科 学校推薦型選抜（県内高校枠）
小論文 出題意図

【課題文の出典】

吉田雄一郎「「地域」と「アート」——相互作用のその先に」野田邦弘・小泉元宏・竹内潔・家中茂編著『アートがひらく地域のこれから——クリエイティビティを生かす社会へ——』ミネルヴァ書房、2020年、113・114頁。

【出題意図】

この設問は、アーティスト・イン・レジデンスのための施設における事例を題材として、地域における芸術活動の意義に関する見識を問う。とりわけ、地域を題材とした創作や地域における作品の提示が、その地域にどのような影響を与えるかを読み取り、その意義を具体的に理解できる思考力が身についているかを評価する。また、受験者が、自らの経験や知識に基づいて、自身の考えを日本語で適切に表現できているかを問うものである。